

留学生通信 30・平成 24 年 2 月 28 日

愛と絆の懸け橋を説く日本語留学生スピーチコンテスト

第 12 回日本語弁論大会・主催・関東甲信越日本語学校連絡協議会

大震災被害を克服し、神奈川県・横浜開港記念館で開催

未曾有の大津波被害をもたらした昨年 3 月 11 日の東日本大震災の影響で、開催が危ぶまれていた「第 12 回日本語学留学生による日本語弁論大会」がさる 2 月 3 日の節分の日、関東甲信越日本語学校連絡協議会主催、法務省、外務省、文科省、神奈川県、横浜市、朝日新聞横浜総局、読売新聞横浜支局、神奈川新聞社、テレビ神奈川、入管協会——の各機関・団体の協力後援の下、横浜市内の開港記念館で開催された。翰林日本語学校など各校関係者の懸命の努力の末に、規模を 3 分の 1 に縮小して実行されたもので、留学生や先生方約 200 人が、出場した 15 人の学校仲間に暖かい歓声を送りながら聴講した。

書類による一次選考を経て弁論大会に参加したのは、千葉、埼玉、神奈川の 3 県の日本語学校からやってきた 5 カ国 15 人の留学生（男性 9 人、女性 6 人）たち。出場者は日本語でのスピーチの成果を競ったが、厳選な審査の結果、以下の 8 人が、それぞれ栄冠を手にした。▽外務大臣賞・外語ビジネス専門学校の台湾人留学生、陳君軒さん。▽文部大臣賞・イラン人留学生、アヴァゼ・アボルファゼ君。▽法務大臣賞・翰林日本語学院の韓国人留学生、崔鍾成さん。▽神奈川県知事賞・KEN 日本語学院の韓国人留学生、曹永民さん。▽横浜市長賞・中国人留学生、朱偉鑫（シュ・イキン）さん。▽入管協会賞・市川日本語学院のフィリピン人留学生、アーネル・プリエト・ソリス君。▽神奈川新聞社賞・朝日国際学院のフィリピン人留学生、リョナ・ロリスさん。▽テレビ神奈川賞・武蔵浦和日本語学院の中国人留学生、肖栄君。

スピーチ内容は、語学習得を通じて感じた日本人観、あるいはアルバイト生活を通して得た社会・文化観を率直に語り、われわれ日本人自身が気づかなかった貴重な視点が数々あった。国境や民族の違いを越え、人の心に訴える素晴らしい感性を感じさせるスピーチで、聞く人の心を揺さぶる場面も再三見られた。一昨年、千葉県市川市で開かれた第 11 回大会、その前の埼玉県大宮市で行われた第 10 回大会でも同様だったが、今回、惜しくも受賞を逃した 7 人のスピーチも、受賞者に劣らぬ心に響く素晴らしいスピーチで温かい拍手を浴びた。そこで今回は、出場者全員のスピーチ内容をここに改めてご紹介する。

◆日本人が世界中に送った大切なメッセージ「絆」——陸佳人燕さん

前半トップは、中国から来た「ふれあい横浜専門学校」女子学生の陸佳燕（リク・カエン、20歳）さん。テーマは「切っても切れない絆」。

日本の友人から「切っても、切っても切れないものは、なあに？」と謎々を架けられ、陸さんは「水」「空気」「風」「光」と次々に応えたものの、いずれも否定されて降参！した挙句、友人が教えてくれた答えが「絆」だった。

「その言葉を聞いた瞬間、それまで遊び半分だった私は強い衝撃を受け、その重さと深さを感じました」と、その時の思いを率直に語る陸さん。

陸さんは日本に来る前に、日本では学校でいじめに会って、先生や両親に相談することもなく自殺を図る小学生がいること。会社が倒産し、経済的に行き詰まって自殺するサラリーマンや、歳をとって孤独な生活を強いられる老人達がたくさんいて、「日本の家族関係や社会の人間関係に問題がある。心と心の繋がり、絆が弱っている」と中国では報じられていることを紹介した。しかし、陸さんは「私は、日本の絆は弱いとは思いません」とその理由を語ってくれた。

「現在、私は日本人の親戚である老夫婦と一緒に住んでいます。テレビを見ながら寝てしまったお婆さんに、そっと毛布をかけてあげるお爺さん。お爺さんの体を考え、栄養のバランスが取れた食事を作るお婆さん。時にはケンカをすることもあります。いつも笑顔の絶えない和やかな家庭です。私にはまさに固い絆で結ばれた老夫婦に見えます」と。

また、陸さんは、時々中国語を教えているが、その中の50歳代の男性が「意味が解らないが、解りますか」と言いながら、親元離れた息子から来た絵文字入りのメールを見せてくれたことを紹介。そこで陸さんが、絵文字の意味を説明してあげると「それまでの少し難しい顔つきが、嬉しさ一杯の笑顔に変わりました。私は親子の絆をこのメールの中に見たような気がしました」と語る。日本人の日常風景に、陸さんの柔らかい視線が注がれていることがわかる。

「確かに欧米の国々と違って、日本人は公衆の面前でキスし、ハグするなどの愛情表現が少ないかもしれません。しかし、これは日本人の慎み深い態度の表れであり、社会生活の違い、風俗、習慣の違いによるもので、決して愛情が少ないためではないと思います」と、日本人を観察する視点も確かだ。

陸さんは、最後に昨年3月の「東日本大震災」に触れ、「多くの人が亡くなり、家や街も壊滅的な打撃を受けました。テレビに映し出される光景を見て、私は涙が止まりませんでした。そして『これからの日本はどうなるのだろうか』と心配でたまりませんでした」と深い同情を寄せつつこう締めくくった。

「日本は震災から立ち上がるため、日本人自身に、また世界中の人々にメッセージを送りました。それが『絆』でした。絆という言葉は今、私の心の中で大きく膨らんでいます。切っても、切っても切れないもの、それが『絆』です」

◆前向きな思考が嫌悪と不平不満から解き放つ——吉磊落さん

前半の部の2番は、中国からきた「横浜デザイン学院」学生の吉磊（キチ・ライ、24歳）さん。スピーチのテーマは「ありがたいという気持ち」。

吉さんは来日当時の挫折話から入った。日本語が下手で意見も言えず、会話も入れず、ただ微笑んでバカのように話を聞く事が多くなり「どうして周りの人は、日本語ばかり言うの、もう嫌だ」と思い孤独になりがちだった自分。

しかし、ある時、男姓が強盗に襲われた事件を友達に話すのを聞いた。石さんは「皆さんがこの襲われた男の人だとしたら、友達にどう言いますか」と会場で問いかけた。「私なら『あのさ、昨日は最悪だったよ。強盗に襲われちゃったよ。今、金も外国人登録証も無くなって困っちゃった。ついてないな』と、文句ばかり言うに違いありません」とマイナス思考だった自己を告白する。

この男姓は友人にこう語ったという。「昨日、強盗に襲われたけど、有難いと思っている。理由は三つ。一つ目は襲われたのは昨日が初めて。二十三年間で一度も襲われたことが無いのはラッキーだ。二つ目は、昨日は襲われたがケガをせずに済んだ。不幸中の幸いだ。三つ目は、私は良い教育を受けたので、強盗の様な人にならなかった。本当に有難いことだ」と。陸さんは「『良い考え方だ』。聞いた私はそう思いました。『今の私は日本語の洪水の中にいるからこそチャンスだ』と思う事にしました」と。プラス思考に転じた瞬間だった。

石さんは、来日前には日本語学校を卒業し、すぐ大学院生になり、すぐ修士を取る目標を立てていたが、大学院の教授にメールを何回出しても返事がもらえず、頑張ったN1（日本語能力試験1級）にも落ち、がっかりして、来日前の夢が遠のくのを感じたその時、先ほどの話が頭に浮かんだと言う。「『さあ有難いという気持ちを持って改めて考えてみよう』、と考えを変えたら、ついに悟りの境地に達することが出来ました。失敗したお蔭で、自分はまだまだ努力不足で、やるべきことがあると分かりました」と、考えを180度変えた石さん。

これをきっかけに石さんは、もっと教授の論文を読み、研究計画書も書き直し、色々な努力をした結果、ついに教授とコンタクトが取れたと言う。

「人間は自分の目標や夢などを実現させようとする時、多かれ少なかれ失敗や挫折に会い、がっかりしたり、迷ったり、夢を諦めてしまいます。しかしこんな時、私たちは自己嫌悪や不平不満を持つべきではありません。有難いという気持ちを持って改めて考えて見ましょう。失敗や挫折があるからこそ、目標や夢などを実現させた時の嬉しさは、何物にも変え難い物になるのではないのでしょうか。ですから、これからどのような失敗や挫折があっても、がっかりしないで、有難いという気持ちを持って、改めて考えて見ましょう。そうすれば新しい道が開けるのではないのでしょうか。ご清聴有難うございました」。そう語る石さんの顔はたくましく、そして清々しかった。

◆人は決して一人でない。家族の絆・友人の絆が人を強くする——陳君軒さん

前半の部の3番は台湾から来た「外語ビジネス専門学校」女学生の陳君軒（チン・クンケン、25歳）さん。外務大臣賞に輝いたテーマは、「つながり」。

「時代の変化に連れて、独り暮らしや結婚しない、子供を産まない女性が増えているようです」と語る陳さんは、「人は誰だって最後は一人です」と主張する日本の学者、上野千鶴子さんの本『おひとりさまの老後』にある言葉に共鳴する女性だった。「独りで大丈夫、むしろその方が楽だ」と思っていた。

陸さんは、台湾で日本語を二年間勉強した結果「もっと学びたい、日本文化をもっと知りたい」と思い、留学を決断して一人で来日。友達もできて毎日充実した学校生活を送っていたが、時々心の中でふと空しさを感じた。「それはジグソーパズルのピースが一つ抜けているような感じです」と語る陸さん。

ある日、留学友達のブログを見て原因が分かった。そこには「いつも笑っていて、毎日楽しく見えるけれど、実は心の中はとても寂しい。家族が側にいないからです」とあった。「そうか……この空しさは家族が側にいないからなのだ」と悟る陳さん。家に帰ると、いつもニコニコ『お帰り』と言ってくれるお母さん。陳さんのわがままに対し説教をし、でも最後には見方になってくれるお父さん。家族は、陳さんの側で知らないうちに支えてくれていたのだ。

「それに全然気づかなかった事がショックでした。すぐ帰国して、家族にこの気持ちを伝えたい」と思ったが、陳さんは日本語能力試験で好成績を出す前に帰りたくない、と煩悶するうちに落ち込み、全部諦める気持ちに傾いていた。

その時だった。日本の友達からメールが届いた。「試験の準備はどう？ 君ちゃんなら大丈夫。受かるのは絶対夢じゃないよ！」。見て陳さんは泣いた。「私を認めてくれる人がいる。私ができるのを信じてくれる人がいる。その瞬間、頭の中に合格した時の両親の笑顔と、友達の『おめでとう！』という声が浮かびました。その想像は私にすごく元気を与えました。『ここで負ける訳にはいかない。また頑張る』という力が湧いてきた」と力強く語る陳さんだ。

陳さんはそれから一生懸命勉強し、試験を受け、コンクールにも参加し、今回、こうして舞台に立った。「不思議です。側にいる人からのほんの一言だけで、言われた人は自分でも信じられないくらい変わるのです。私は『一人で大丈夫』と言えるのは、実は支えてくれる人が側にいるからこそ、と気づきました。人生は苦楽に満ち、越えられない山や一人では解決できない事がたくさんあります。でも側に認めてくれ、支えてくれる友達が一人いるだけで、強い力になると私は信じるようになりました」と家族の絆、友人の絆の大切さを強調した。

「皆さんは身近な人や家族が、知らないうちに自分を支えていることに気付いていますか？ これからは家族の絆や身近な人々の絆を大切にしましょう」と語る陳さんの顔は晴れやかだった。

◆笑顔にできる3つの方法が世界を変える—アーネル・プリエト・ソリスさん

前半の部の4番目は、フィリピンから来た「市川日本語学院」生のアーネル・プリエト・ソリスさん（26歳）。入管協会賞に輝いたテーマは「僕たちは世界を変えることができる」

ソリスさんは「皆さんは、何かを変えることができると考えたことがありますか。あるなら、何を変えることができますか。私は『僕たちは世界を変えることができるかもしれない』と思います」と、最初に大きな理想を語った。

ある日プリエトさんは、ボランティアとしてカンボジアで学校を作った日本の大学生の映画『僕たちは世界を変えることができない』を見て、高校時代のボランティア活動を思い出した。勉強したい子供たちの為に教師のボランティアをし、知り合いの家の裏庭の教室で、意欲溢れた子供たちが笑顔で歓迎してくれたその瞬間、ソリスさんは「私は教師を志願しよう」と自らに誓った。

大学では学校に行けない子供を教育するボランティア活動に加わった。この組織は「日本、フィリピンボランティア協会」の支援を受け、ソリスさんらは数学や科学、英語、フィリピン語だけではなく日本語も教えた。授業後、子供たちは必ず笑顔で「ありがとう」「サラマツポ」と、感謝の言葉を忘れなかった。家計を助ける仕事で休む子供のために、何度も親に登校を促し、悩むこともあったが、「子供たちのサラマツポがいつも元気をくれました」と語る。

始め週一回の日曜教室が盛んになり、子供が増え、友達や大学生たちに声をかけ、多数のボランティアが参加してくれた。活動を通じ、ソリスさんは、大学卒業後「教師になり、故郷に自分の学校を作りたい」と日本に留学した。

映画では、大学生たちはボランティアでカンボジアに学校を作り、ソリスさんは、ボランティアで子供たちに勉強を教えた。映画と自己体験に違いはあるが、一つ同じ事があったという。「それは、皆の笑顔です。映画で大学生たちは本当に世界を変えることができなかつたのでしょうか。私はそうは思いません。だって、子供たちもみんな笑って、きらきら輝いていましたから」と語る。

「では、どうすれば、みんなを笑顔にできるのでしょうか」と問いかけたソリスさんは、三つの方法を提言した。

「まず一つ目は、多くの人に役立つことをする。例えば、ボランティアの活動を始めたら良いと思います。二つ目は、他の人と知識を共有する。学習したい子供たちに教えるだけではなく、教師としてボランティアをしたい人にも、その方法を教えたらいと思います。三つ目、誠実である。子供たちは、私たちが誠実でないとすぐわかりますので、いつも誠実でいた方がいいでしょう。この三つの方法で、私もみんなも笑顔になれる。みんなで世界の笑顔を作りましょう。そうすれば、僕たちは世界を平和に変えることができますと思います」

理想に溢れた立派なメッセージだ。ソリスさんも信念と笑顔で輝いていた。

◆夢と希望をダンスに託した私の志——熊嬢さん

前半の部の5番目は中国から来た「横浜国際教育学院」女学生の熊嬢（ユウ・エン、24歳）さん。スピーチのテーマは「私とダンス」

『私はダンスを学ぶために、日本に来ました』と私が言ったら、聞いた相手は、私と同じ中国人でも、日本人でも皆びっくりします。なかなか理解できなさそうな顔をして『なんで？』と私に質問します。日本語学校で勉強している皆さんは、ほとんど進学のために日本に来たと思います。私のような、ダンスの趣味が理由で、外国に来るなんて、おかしいのではないかと思います」と、熊嬢さんは、まず自分の留学目的から切り出した。

子供の頃からダンスが好きだった熊嬢さん。テレビで歌手が歌いながら、ダンスをしているのを見るたびに、思わず体を動かしていた。ディスコ音楽を聞いても「思わず体が動いた」。しかし、その頃はただの子供の趣味というだけで、熊嬢さんも普通の子供のように、進学し、ダンスとは離れていった。だが、大学一年生の時、熊嬢さんが進んだ大学に韓国人の留学生がたくさんきたある日、韓国人学生が、すれ違った時、急に止まって熊嬢さんの顔を見て「韓国のボアという歌手に似ている」と話しかけてきた。これが、熊嬢さんの人生における一大転機となった。

『ボアって、誰』と思ったけれど、それが誰でも、スターに似ているのは嬉しいものです。一体どんな歌手か気になって、帰ってからインターネットで調べました。するとボアのビデオがどんどん出てきました。すぐにボアのダンスは私を釘付けにしました。こんなにかっこよくダンスをできる女の子を見たのは初めて。これがダンスへの意欲が再び生まれたきっかけでした」

その後、熊嬢さんは、インターネットでビデオを見ながら、自分でダンスの練習を始めて、自分のダンスのスタイルも出来てきた。以来、「毎日夢中になって練習して、学校の後輩を集めて習ったダンスを教え、学校の演芸公演に出て、私のダンスは人気が出ました」と語る。夢中になれるのは青年の特権だ。

その後、熊嬢さんは、結婚式や会社のイベント、販売促進活動などに出演して、成功し、ダンスの技術も向上してプロのダンサーを目指す決意を固め「日本はプロの先生が集まっているところだと聞いて、夢を持って来た」熊嬢さんだ。

「夢があるからといって、必ず実現するとは限りませんが、大事なのは、夢を持って最後までやり遂げることです。ただ現実には夢を持っている人は数えきれないぐらいいても、最後までやり遂げる人はごくまれでしょう。私が頑張っているこの少数派に入りたい。ダンスの先生になるという夢と目標とそれをやり遂げる意志さえ持てば、成功するのは遠い将来の事ではありません。皆さんも夢と意志、この二つをもっていますか？これから自分の夢を持って最後まで一緒に頑張りましょう！」。ダンスに人生を託す熊嬢さんの目は希望に輝いていた。

◆伝統を守る人々に感動 急がない日本に視線を注ぐ——曹永民さん

前半の部の6番は、韓国から来た「KEN日本語学院」生の曹永民（ジョ・ヨンミン、26歳）さん。神奈川県知事賞に輝いたテーマは「早く、早く」。

曹さんは韓国人と日本人の気質の違いから入った。「韓国人は気が短いことで有名です」と、最近、本国で人気の＜韓国人の早く、早く＞というCMシリーズを紹介し、＜気が短い韓国人・ベスト10＞というリサーチ結果にも触れた。

1位は「相手が通話中なのに3回以上電話をかける人」。続いて「電車の乗り換え時間短縮の為に乗換駅の階段に合わせて電車に乗る人」「電子レンジのスタートボタンを押してそれを見ながら待つ人」等々、紹介のたびに笑いを誘う。

曹さんは、韓国のランチ風景も取り上げる。食堂に入るとテーブルの上にはすでにキムチなどのおかずが準備され、席に座ると、すぐ日替わりのメインのおかずとご飯とスープが出てくる。曹さんが「どこに座るか、何を食べるか、など考える必要がない。1時間の昼休みの間にご飯を食べて、コーヒーを賭けたビリヤードを30分ぐらいして、簡単なティータイムまで出来ました」と言うと、会場からは、余りのスピードぶりに「おっ！」と驚きの声もれた。

曹さんは、「早く、早く」の韓国人気質がプラスに働いた事例にも触れた。

「1950年の戦争（朝鮮戦争）で目茶苦茶になった韓国は35年後の1988年にはソウルオリンピックを開催し、2002年にはワールドカップを日本と共同開催できました。また、気が短い韓国人の期待に応えるために、IT、インターネット産業など、速度が重要な産業は世界的な水準まで発展できたと思います」と語る曹さんは、誇らしげだ。

しかし曹さんは「早く、早く社会は疲れやすく厳しいです。余裕がなくなり、現代社会に対し不安を感じ、結局それがストレスの原因になります」と語る。

そこで、日本に来て10カ月くらいになる曹さんが気づいた特徴があった。

「スピードで成功した人もいますが、伝統的なものを守り、ゆっくり変化に対応して自分の速度を守る人も多いと思いました。日本は昔の物を大切に扱い、伝統を守る気持ちが強いと思います。先日、テレビで蠟燭を作る職人の番組を見ました。伝統的な蠟燭の作り方は難しく、長い時間がかかりました。私はその蠟燭は値段も高く、不便そうだと思いました。でもその人は自分の仕事に誇りを持って仕事をしていました。日本のこの伝統を守る人の姿に感激しました」

「韓国では新しく、より便利で良いものが出ると、昔の物は忘れられてしまっていますが、伝統や文化を大切にする心が韓国にも必要だと思いました。自分のことばかり考えず、他人の事も考える日本人の特性を見て『早く、早く』だけを考えてきた私には驚きでした。私は日本で、自分の速度を守り、人生を楽しむ方法を学んで、急がない韓国人として頑張りたいです」

日韓社会の違いと日本人が忘れていた美質を、曹さんは気づかせてくれた。

◆心と心のバリアフリーを取り除け——アユナ・ムンクエワさん

前半の部の7番目はロシアから来た「東京日語学院」女学生のアユナ・ムンクエワさん（23歳）。スピーチのテーマは「バリアのない世界を希望して」

「大学でロシア人の教授が言いました。『地図ではこんなに近いのに、やっぱり遠いな』。現在も日露関係は暖かいとは言えませんが、ロシアの各地で日本文化のブームです。レストランで、味噌汁、寿司、うどん、蕎麦を食べるのはクールです。私の故郷・ウランウデは、アニメとコスプレのフェスタが良く行われます。日本文化に興味を持っている人が大勢集まって、とても楽しいです」

そう語るアユナさんだが、日本でとても感動したことがあったという。

「ある日、駅で友達と電車を待っていた時です。隣に立っていた駅の人が手に何かを持って待ち構えていました。電車が来て、ドアが開いた途端に事情が分かりました。駅員は電車から降りた車椅子の女性を迎えに来たのです。その場面から国にいる妹の姿が浮かんで、日本の優しさに感激し、涙がでました」

アユナさんの妹は、十七歳で「手術をしても障害者になる可能性が高い」という珍しい病気にかかり、家族は奇跡を信じ続けた。大好きな妹の世話のために、アユナさんが日本留学をキャンセルしようと決めて、見舞いに行ったところ「どうして、そう簡単に夢を諦めるの。私、毎日病気に負けないように頑張っているの。きっと元気になる！そしたら、日本にいるお姉ちゃんに会いに行きたい」と、逆に妹さんに励まされ、アユナさんの留学は実現したのだった。

涙の訳だが、ロシアでは障害者の生活は厳しい。ほぼ社会生活は終わり、手伝いがないとスーパーで買い物もできない。イベントやフェスタも参加できない。身障者用の設備が少なく、車椅子の人たちが乗れるバスもほとんどない。アユナさんは「身体障害者は外出できずに部屋に引きこもり、だんだん社会から離れます。妹は、何が起こっても笑顔でいる可愛い子です。もし、障害者になり、どこにも行けなくなったら……。想像するだけで怖かった」と告白する。

「私は妹の言葉のお蔭で日本に来られました。日本はバリアフリーが進んでいて、障害者でも電車で自由に乗れるし、皆と人生を味わうこともできる。すごい！」と感嘆しきりなアユナさんだが、今では関心が広がり「身体障害者の問題だけではなくて、国と国、人と人との関係でも、柔らかいロシア、厳しい日本の間に例えバリアがあっても、心と心で理解しあって人々との交流が深まれば、バリアが乗り越えられる！それが本当のバリアフリーです。日露関係もきっと暖かくなります！」と、留学生らに熱く訴え、盛んな拍手を浴びた。

アユナさんの背中を押した妹さんは、サンクトペテルブルグの医者のお蔭で、完治し、今は医大進学を目指し勉強中だ。「大学に入ったら日本に連れてきます。自由に街に出ている車椅子の人を見て、妹は一体どんな顔をするでしょう」

アユナさんの理想と希望に満ちた瞳は、嬉しきで一杯だった。

◆日本語はすごく美しく可愛い美人です——肖栄さん

前半の部の8番目は中国から来た「武蔵浦和日本語学院」生の肖栄（ショウ・エイ、29歳）さん。テレビ神奈川賞に輝いたテーマは、「日本語は美人です」。

「私の夢は一つだけ、女性を追い求めることです。みなさん、これが夢ですかって、びっくりしましたか？ 実は私の目から見ると、日本語はすごく美しく可愛い美人です」と、とてもユニークな切り出し方で、会場の笑いをとった肖栄さんは、「日本語が美人だ」という理由を三つあげた。

一番目、日本語は女性に似ている。日本の歴史上、男性は漢字を使い、平仮名と片仮名は、女性が使った文字であり、「です」「ます」の敬語は、最初は標準語ではなく、江戸時代の芸者さんの言葉だったと。「その時代の芸者さんは、全員美人ですよ！ 美人の言葉は優しいし、可愛いし、使う人がだんだん増えるに伴って、標準語になりました」と、力説する肖さんに拍手が送られた。

二番目、日本語の一番上手な使い手も女性だ。中国で一番有名な文学作品は、女性作者の『おしん』と『窓際のとつとちゃん』。「作品の中に流れる女性の強さと暖かい思いやりは、何年も中国人を感動させてきました。日本では、女性は男性よりずっと文学の情熱があります。たぶん『源氏物語』からの伝統です」と言葉巧みに解説する肖さん。「文学少女」という言葉も日本語だけだという。

三番目、日本では女性の声が一番美しい。日本語学校でも八〇%以上の先生は女性で、男性より話が上手。有名な声優の多くも女性。尊敬する声優は井上喜久子さん。今人気の釘宮理恵さんと水樹奈々さんらの努力下、日本の声優の声は世界で一番人気の声になったという。「もし、信じられないならアニメを見て下さい。世界中の言葉で、ご飯を食べることを忘れさせるぐらい不思議な魅力を持っている声は、美人の誉れ高い日本語だけです」と絶賛する肖さんだ。

肖さんは八歳から二十年間アニメを見て育ち、大好きになって留学を決めた。両親に強く反対されたが、五年間貯蓄をして学費を貯め、バイトと5時間睡眠で勉強中だ。「疲れて、時々『もうダメだ！』と思うが、でも、その＜美人＞はいつも側にいて、漫画やアニメを通して『大丈夫よ！ 頑張っってね！ やめないで！』と言って力を貸してくれる」と語ると、会場は笑い拍手の渦に。

「皆さん、以上の理由は全部忘れてもかまいません。でも、一つの事実だけ必ず覚えて下さい。『日本語は美人ですよ』。全世界の言葉で、一番美しく可愛い美人です。もし、皆さんが彼女を愛したら、彼女は必ず百倍報いてくれます。一緒に遊んだり、弁当を作ってくれたり、将来、結婚するかもしれませんよ！」

「だから、皆さん、一緒に日本語をきちんと勉強しましょう！ もし、日本語が上手になれば、私たちの心は必ずその美人のように、きれいで、優しくなります。そして最後に、皆さんの夢はきっと叶うことでしょう！」

肖さんの「日本語美人論」には、日本人が忘れたものが一杯詰まっていた。

◆日本で最も高価で大切な買い物は時間です——リョナ・ロリスさん

後半の部トップの9番は、フィリピンから来た「朝日国際学院」女学生のリョナ・ロスさん(22歳)。神奈川新聞社賞に輝いたテーマは「高価な買い物」。

ロリスさんは2010年6月、日本の会社の募集試験に合格して来日した。

「学生として日本語を学び、卒業後は日本とフィリピンの交流の仕事をします。大学生の時から『日本で仕事をしたい』と思っていたので、夢がかない本当に嬉しかったです。日本に来る前は、日本には欲しいものが何でもあって、何でも買えると思って期待で一杯だった」

空港には会社の人を迎えに来て、住まい、日本語学校、アルバイトなどを説明してくれ、夜は会社の仲間が歓迎会を開いてくれた。「初めて食べた日本料理は美味しかったし、皆さんも優しくしてくれて、とても幸せな気持ちになりました」と順調なスタートを切ったロリスさんだが、食事後、請求書を見てびっくりした。金額は1万円。ロリスさんは「これは本当ですか?」と聞いた程だ。

「フィリピンでは1万円は5000ペソです。それは私の4人家族が2週間以上も食事をできる金額です。そんなお金を私の歓迎会の為に使って良いのか、と思ったのです。私を見て『そんな事心配ないよ』と会社の人には笑いました」

日本での生活が始まり、アルファベットとは全然違う漢字を、覚えなければいけないと必死に勉強。「何でもある国、何でも買える国日本」と思っていたが、やはり物価の高さにもびっくりし、がっかりした。母国では50ペソ、日本円で100円あれば、ご飯とおかず、飲み物付きの食事ができるが、日本ではとても無理。ロリスさんは「私はスーパーやコンビニで、品物の値段を見るたびにがっかりし、私の目は何度も飛び出しました」と、頭が痛む日々を送った。

ある日、アルバイト先の先輩が、遅刻しそうになり、タクシーで駆けつけ、走れば5分の距離に710円を払った。ロリスさんの目はまた飛び出した。国では7.5ペソ、15円のジープニーか、30円のトライクルだからだ。

「日本の交通手段は正確で、便利で、早い。フィリピンは、マニラしか電車はありませんが、日本ではどこでも鉄道が通り、人々はそれを利用して時間を有効に使っています。新幹線もあります。日本では一番高価な買い物は時間だと思いました。私はもう値段を比べてタメ息をつく事は止めました。私の国では時はゆっくりです。1日くらい何もしなくてもあわてませんが、今は日本で過ごす貴重な時間を無駄にしては『もったいない』と思うようになりました」

「私はこれから2年ぐらい専門学校で勉強するつもりです。長い人生の中の2年は短いかもしれないが、ここで過ごす年月は特別な価値のある時間だと思っています。『時は金なり』という日本の諺がわかるようになりました。時間は最も高い、でも大切な買い物です。もっともっと大切にしませんか!」。時の大切さを知ったロリスさんの前途は、きっと大いなる前進が約束されることだろう。

◆日本人の自然観に学び、中国の田舎の建設に力を注ぎたい——張成さん

後半の部の10番は、中国からきた「Fuji Language School」生の張成さん（24歳）。テーマは「紅葉 猫 星空」。

張さんは巧みに話題を組み合わせて話し、実に多くの事を考えさせてくれた。

「伝統とは、内から外に発散する意識形態です。いつも自然に敬愛を持っている。伝統を大切にしています。私の住んでいる前橋市は、そんな町です。紅葉が美しく、自然に満ちています。森林比率の高い国でも前橋市は高い。自然を愛する心は日本人の国民性です。大阪の万博記念公園で炎のようなく紅葉>を見つけ、中国の詩人杜甫の名句を思い出しました。《停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花》。馬車を止め、夕暮れの楓の林をゆるりと楽しんだ。霜の降りた葉は、春爛漫の花よりもさらに紅い、という意味です」。

地方都市といえば、シャッター商店街しか思い浮かばない最近日本人の感性の貧困さに比べて、張さんの豊かな浪漫性が出だしから感じられて素晴らしい。

「<猫>の話の舞台は前橋市の敷島公園です。環境が良い緑地で、私は毎日そこへ行って運動をします。おかしいのは、毎回違うおばあさんが数匹の野良猫に餌をやっていることです。声をかけて見たおばあさんによると、その野良猫は、来た時死にそうでした。近くの獣医に連れて行き、薬と注射をやったので、猫は生き延びました。その後、この公園に集まってきた野良猫たちの面倒を地元のお婆さんたちが自発的に見ることになりました。猫たちは名前まで貰って、今は公園の一部分になりました。そして猫のプウちゃん、アカトラちゃんに挨拶するのが、私の日課になりました」。

猫にもお年寄りにも、張さんの柔らかな視線が注がれていることが分かる。

「最後にく<星空>です。星空はいつも人間の想像を誘い、未知へと誘ってくれます。残念ながら、中国の武漢にいた私は十年ぐらい星空を見たことがありませんでした。前橋の生活が始まった後、ある夜、私がふと空を見ると、前橋の星空は凄く綺麗で、無数の星がきらきらして、私に「お久しぶり」と言ってくれているようでした。きれいな星空は、健やかな大気と光公害の少なさを示しています。このような環境は、社会みんなの協力が無ければできません。アジアの経済大国の地位を保ちながら、こんな綺麗な星空を守っている日本人の環境保護意識の高さに感心しました」。

「現在、アジア諸国は皆、科学技術や先進文化を日本に学んでいます。しかし、私の考えでは、その全ての核心は日本人の心に深く埋められている自然に対する敬意だと思いました。田舎が整っていることに感心しました。私が、中国に帰ったら、中国の田舎の建設に自分の力を注ぎたいです」

日本の科学技術や先進文化の核心まで分析した張さんが、母国でどんな都市造りをするのか、是非見て見たい、という気持ちが沸々と湧くスピーチだった。

◆ペルシャ・キュロス皇帝の「人権の碑」——アヴァゼ・アボルファズさん

午後の11番、灼熱の国イランからきた「双葉外語学校」生のアヴァゼ・アボルファズさん(23歳)。文部大臣賞を受賞したテーマは「歴史を勉強として」。

アボルファズ君は、スピーチのテーマとしては唯一、母国の歴史を誇らかに取り上げ、聴衆に貴重な史実を披露した。イランの古代国家・ペルシャ帝国が、約2600年前に賢帝・キュロス皇帝によって建設されたことを紹介した上で、よくニュースになる人権、社会保険、妊婦のための産休などの概念や制度は「すべてキュロス皇帝がペルシャの法律として定めたものだそうです」と語りかけてスタートし、その具体例を次々に挙げた。例えば、古代エジプトではピラミッド建設に黒人を使い、バビロンではユダヤ人を奴隷として使う、など当時は人種差別や奴隷制度が普通だったが、ペルシャでは、国の建物を建てる時は労働者を募集し給料を払ったこと。その給料の支払いの為にペルシャ人は2500年前に硬貨を作り、広大なペルシャ帝国のどこでも使えたために、売買が楽になったこと。

また、キュロス皇帝はバビロン領有しても、バビロン人の宗教を大事にし、人々の財産や資産や命を守り、奴隷として働かされていたユダヤ人を自由に解放したこと。こうしたキュロス皇帝がバビロンで行った治政は石碑に記録され、ロンドンの大英博物館に保存されている事実を披露した。さらに「その碑銘は1971年には、国連から『人権の碑銘』と呼ばれ、コピーがニューヨークの国連の建物に置かれている」とスピーチを続けた。

その上で、同君は、善政を治めたキュロス皇帝がペルシャに出現したのは、4000年来、地元の人々によって守られてきた「三つの信念を統治の基本にしたからだ」とその理由を語った。その三つの信念とは、①「良好な考え方」。人を騙たり、任せられたことを適当にしないこと。②「良好な話し方」。日常生活では融和的なコミュニケーションが大切で、上手に話せば、人間関係は良くなること。③「良好なやり方や行動」。考え方や話し方だけでは足りない。実際の行動が良い社会を作るポイントになる、ということだ。

アボルファズ君は最後に、世界から戦争が絶えず、殺戮や人種差別が続いているとして「では、私たちはこの時代、ただ救世主の登場を待ちますか。それともできるだけ自分で頑張って、平和な世界、住みよい社会を造りますか」と問いかけた上で、「平和の到来を待つことは愚かです。今から一日も早くみんなで平和な世界を築き上げましょう。私は、皆さんにペルシャ人とキュロスが信じて守った三つの信念をお勧めします。良好な考え方を持ち、良好な話し方をし、良好な行動ができるように。そこで初めて世界が平和になり、より良い発展ができると思います。そのとき『私は世界の役に立てた』と言えるのではないのでしょうか」と信念を披歴してスピーチを結び、会場から拍手を浴びた。

◆日本人の忘れもの、老人ホームのお年寄りへ愛を——張栄さん

後半の部の12番は中国から来た「岩谷学園テクノビジネス日本語科」女学生の張栄さん（25歳）。テーマは「一番大切な人」。

「自分の心に『一番大切な人、その人は誰ですか』言ってみてください。私は覚えています。小さい時に熱があったら、私をおんぶして病院へ連れていってくれました。悲しくて辛い時に慰めて、励ましてくれました。その人は母です！」

「私の故郷は中国の遼寧省です。冬はすごく寒いんです。子供の頃私はいつも外で友達と遊んでいて凍えてしまいました。『お母さん、手がすごく冷たい。凍えちゃう。我慢できない』。そんな時、母は何も言わずに自分の服をめくって触らせました。きっとすごく冷たかったに違いありません。『お母さん、本当にありがとう』。学校から帰った時の母の優しい笑顔は、はっきり私の頭の中に残っています。母の笑顔は温かくて、私は心を落ち着かせることができました」

母親を想う気持ちは、国境、民族、宗教、男女、年齢の違いを越えて万国共通だ。張さんは留学して2年。老人ホームでアルバイトをしてきたが、大部分のお年寄りは認知症で、色々な事をすぐに忘れてしまう。しかし「ただ一つ子供たちを気にかけることは忘れません」。90歳くらいのお婆さんの平野さんは「子供が外で私を待っている。会いたいんだけど、どこから出られるかな」と張さんに聞くが、外へは行けない。張さんは「その時、私の目は涙が溢れそうになります。自分がどんな状況にいても、母親は子供を一番心配するものなのです。自分の子供を育てるために自分の一生の精力を注いでくれた母は、私が一番感謝すべき人だと思います。それは皆さんも同じでしょう」と呼びかける。

中国も高齢化社会に入り、新しい老人ホームもでき「子供と一緒に生活する」という中国の伝統的な観念も変化しつつある。日本は高齢化先進国で、老人ホームの管理や施設、サービスでも先頭に立っているが、介護士やヘルパーの待遇問題、「利用者の本当の幸せとは何か」など問題は多い、と張さんは指摘する。

「私がアルバイトをしている間に、お年寄りたちの家族はあまり来ませんが、お年寄りにとって家族の関心が大切だと感じています。私たちが側にいない時、いつも電話で温かい言葉をかけ、寒い時はお母さんに温かい服を着せてあげましょう。それは全部小さいことですが、私たちの大切な人にとって、それは一番幸せなことだと思います」。張さんの温かな心根が素晴らしい。

「私は将来、老人ホームを作りたいと考えています。お年寄りも家族も、働く人も大切にしていきたいと思っています。そのために何ができるかももう少し日本で勉強しなければなりません。アルバイトをしながら『お年寄りのために本当に必要なものは何か』と考えています。皆さん一緒に頑張りましょう！」

「日本人が忘れた大切なものは何か」を気づかせてくれた、張さんのスピーチと崇高な志に、会場からは惜しみない拍手が送られた。

◆助け合う「絆の大切さ」を気づかせた、ある出会い——崔鐘成さん

後半部の13番目は韓国から来た「翰林日本語学院」生の崔鐘成（チェ・ジョンソン、25歳）さん。法務大臣賞を受賞したスピーチのテーマは「気づき」。

崔さんは今年七月に来日。当初は大変だったが、日本の生活にも慣れ、十月からは宅配便の会社で早朝仕分けのバイト中だ。早起は大変だが、崔さんは「バイトをして一番良かったのは、関根さんという方と出会えたからです」という。

崔さんが出会った関根さんは、当初、他の従業員と同様に仕事のことを良く教えてくれる「同じバイト先の優しい小母さん」という印象だけだった。ところが一週間ぐらい経ったある日、関根さんは、崔さんと中国人学生を呼び「留学生生活を応援したい」と言いだし、週に何回も弁当を作り渡すようになった。崔さんは何度も「ありがとうございます」とお礼を言い、お弁当を食べた。

ところがある朝、崔さんが日本語学校の授業前に、関根さんに貰った弁当を食べ始めたところ、隣席のクラスメートが「チェさん、その弁当、自分で用意したんですか？すごい！」と話しかけてきた。崔さんは首を横に振り、弁当の由来を話したら、クラスメートは「じゃあ、その人は一体何時に起きるのですか？」と声を挙げた。その時、崔さんに衝撃が走った。

「私はしばらくの間、その質問に答えられませんでした。クラスメートの言葉を聞いた瞬間、今まで考えもしなかった事に気がついたのです。仕事が始まるのは朝の6時。関根さんは一体何時に起きるのだろうか？そして、その早い朝、私と中国人留学生の分まで……。どれだけ手間がかかるのだろうか！」

「今までの私は、人から物を貰っても、ただ『有難い』と思うだけで、その人が、それをくれる前の手間や配慮の気持ちまで思い至らなかった。その後、今まで私を助けてくれた人々の事も思い出しました。韓国でも、日本でも、私の生活は、数えきれない人々の援けや配慮で守られていた。日本に来て、私はやっと『人は常に多くの人に支えられている』という事が分かったのです」

崔さんは「人に支えられている」のは「単純に人に助けられた」という事ではなく「一人の人を支える沢山の人がいる。その支えられた人は、また他の人を支える一人になる。つまり人々はお互いに助け合うことで繋がっている」という世間の真理に気づいた。「それによって、人はどんな困難も乗り越える強さを持つようになるのではないのでしょうか」。はつきりと目覚めた崔さんだ。

韓国にいた時は「人は皆、結局一人で生きるもので、一人で頑張っ、一人で何でもできるように」と考えていたが、関根さんの無償の行為を通し「その考え方だけは、少しずつ、しかし、確実に変化した」という。

「私は、この日本で得た『大切な気づき』を胸に刻み、これからは人々に支えられた分、もっと他の人を支えられるような人間になりたいと思います」と力強く誓ってスピーチを締めくくった。その前途が楽しみな崔青年だ。

◆わが子を立ち直らせた母の愛、親の愛——朱偉鑫さん

後半の部の14番目は、中国からきた「国際情報ビジネス専門学校」生の朱偉鑫（シュ・イキン、25歳）さん。横浜市長賞に輝いたテーマは「親に『うるさい！』って言わないで」

朱さんは上海生まれの一人っ子。両親の愛を一身に受けて育ち、欲しい物は、何でも買ってもらえ、行きたい所へも、連れて行ってもらえた。だから「僕はうちで一番じゃないか」と思っていた。中学生で音楽に興味湧き、宿題もやらずにスターの夢を追い駆けた。「その時初めて親に怒られました。私は『うるさい！昔はやりたいことは全部やらせてくれた。何で今は駄目なんだ！』と反抗しました。母親の涙が出ました。その時から私は、両親が何を言っても話を聞かず『うるさい！聞きたくない！』と言い返し続けました」

朱さんは演劇大学に入学。両親も喜び、母親は有名な歌の先生を付けてくれたが、自信過剰で「こんな年を取った先生からは習えない！自分のことは自分で決めるから、お母さん達は言わないで」と言い放った。自分の能力を過信し、学校をサボり、仲間とバンド練習ばかり。「コンテストで優勝し、有名になって成功するに違いない」と思い、北京へ行きバンド大会に参加した。でも結果はいつも予備選敗退。何回挑戦しても結果は同じ。「何も分かっていなかった私は、バンドを解散しギリギリで大学を卒業しました」と朱さん。

学校を出て、二十歳になっても仕事が見つからず、家にいるしかなかった朱さんは、同窓会に行くと、友達達は皆、立派になっていて「今何の仕事をやっているの？」と聞かれのが辛かったと言う。「何で親の話を見殺したんだろう。本当に僕は馬鹿だ！僕は二十年間一体何をやってきたんだ」と後悔した。

「そう思っていた時『まだ機会はありますよ』と母が言ってくれ、僕は友達のように話しました。母は『大学に入った時から、あなたの為に貯金し三百万円あります。何かをやりたい時にあげる』と言い、このままでは駄目だ。『僕にはもう一つ夢がある。日本に留学させて下さい』と頼んだのです」

朱さんは2010年4月に留学できた。7月からはバイトを始めた。

「今は六本木で美容師の仕事をしています。いつも『うるさい、うるさい』と言って、話も聞かずに、自分の気持ちしか考えなかった僕を『何でそんなに愛してくれるの？』と母に聞くと、一言『あなたの母さんだから』と。その言葉に、私の心は、針が刺すほど痛くなって涙がでました。留学して一年半が経ちました。勉強は好きではないが、頑張るしかないと思っています。旅行も往かず、貯金してくれた親に感謝しています。皆さんも親に感謝して『ありがとう』と言ってあげて下さい。あまり日本語は上手ではないが、日本語で自分の気持ちを伝えたかったのです。今日はありがとうございました」

親の愛の深さを率直に語る朱さんに、会場からは温かい拍手が送られた。

◆災難の時、愛が現れる。東日本大震災と「愛の哲学」——林斯沢さん

後半の部の最後の15番目は、中国から来た「飛鳥学院」生の林斯沢（リン・シタク、22歳）さん。テーマは「曲の流れ」。

「皆さん、人々の間には曲が流れていると思いませんか。どうして今まで知らなかった二人が恋人になれるのか。それは心の深い所から共鳴が生まれるからです。その共鳴は曲になります。二人の心でその曲を奏でると愛が生まれます。皆さんも経験があるのではないのでしょうか。では、曲が流れるのは人と人との間だけでしょうか。私は様々な生物や物の間にも流れていると思います。国と国との間にも美しい曲が流れています」

林さんは、昨年4月に来日。ある日、家族と一緒にスーパーに買い物に行き、レジ前に2008年の「中国四川大震災援助募金」と書いてある箱に気づいた。「3年も経ち、私の国では募金箱はもうなかなか見れないのに、どうして2010年の日本でまだやっているの？ 私の心の中に温かい曲が流れました」

2011年3月11日、東日本大震災の日が飛鳥学院の卒業式だった。在校生代表として送辞を読んだ林さんは、銀行に行き、地面が激しく揺れる大地震に遭遇した。日本は一日中、大地震、津波、原発事故という大被害を受けた。

「連絡が取れず、心配した両親から電話がかかってきました。『大丈夫か、チケットはもう買ったか、早く帰って』。私も怖くて早く帰りたかった。一緒に住んでいる日本人のおじさんは『大丈夫。状況がもっと分かってから決めなよ』と言われても、『友達は帰った。帰るのが一番だ』と思っていました」

「日本は強い。簡単に倒れる訳がないよ。世界各国からの援助のお蔭で、きっと元気になる」と、おじさんは言った。尖閣諸島問題などで日中関係は緊張状態が続き、中国は援助に来たか心配になったが、四川大震災を援助してくれた日本のように、すぐに救援に来た。温華峰首相も日本に弔意を表した。小学生も募金活動を始めた。「四川大震災の時は、日本が助けてくれた。今度は私たちが日本を助けなければいけない。日本、頑張れ！」という声が高まった。

「人々の心から温かい曲が日本に流れて来ました。私も日本で頑張ろうと思いました。私は来年の四月から大学生になります。たくさんの日本人と友達になり、色々な人と心の深いところで共鳴したい。中国には一つの言葉があります。『患難見真情』。これは災難の時、愛が現れるという意味です。今度の震災は大変なことですが、国と国、人と人との間に温かい曲が流れていますから、日本は元気になると思います。誰でも、何時でも、何処でも、心が温かく感じられるように、皆でこの素晴らしい曲を奏でましょう。頑張れ！ニッポン！」

「心の深いところから共鳴が生まれ、その共鳴は曲になる。二人の心でその曲を奏でると愛が生まれる。災難の時、愛が現れる」。林さんの愛の哲学に共鳴！